

聞の社会戯評を経て、絵本の制作に専念。『フィンランドのこびとたちトントウ』（一九八二）、『Korimäen talosa wänwän丘』（八〇）など、フィンランド文化を楽しく伝える絵本は自国で好評を博す。『サンタクロースと小人たち』（八二）が二カ国で翻訳出版されて以来、世界的人気を獲得している。

（稲垣美晴）

## ケ

ケイ エレン Ellen Key 一八四九—一九二六 スウェーデンの女流思想家。地主貴族の家に生まれ、開明的な政治家だった父親の影響を受ける。一八八〇年から二〇年間、ストックホルムの私立中等学校の教師や、労働者学校の講師などを経験した後、著作活動に入った。北方の貧しい農業国から工業国に脱皮しようとする大きな変動の時期を迎えていたスウェーデンの社会を背景に、抑圧されていた婦人や児童の解放を主張する大胆な発言をして、国内はもちろん、国際的にも広く注目される多くの業績を残した。中でも、二〇

世紀の到来を前に発表された『児童の世紀』（一九〇〇）は、国際的な反響を呼び、各国語に翻訳紹介されて、今世紀初頭の児童中心主義思想や、新教育運動のバイブル的役割を果たした。わが国でも一九〇六年に、大村仁太郎によりドイツ語版からの最初の翻訳『二十世紀は児童の世界』が出た。その後、英語版からの原田実訳『児童の世紀』（二二）が出て広く普及し、現在は原語訳（七九、小野寺信・百合子訳）も出ている。

（柳沢重也・富田博之）

## 兄 弟

けいてい 姉妹せいまい

と同時に発行された少年雑誌。国学院大学出版部。一九〇九年（明四二）六月創刊、一二〇ページ、一〇銭。編集兼発行人目黒和三郎名儀になっているが、編集担当は畠山健（波多野勤子の父）、遅れて藤沢衛彦が担当。同大の教授陣の協力を得て知識情報読み物が書かれ、文芸読み物は、三島霜川、水野葉舟、小島烏水、服部躬治らが主に執筆した。お伽噺を抜け出る小説風な志向がみられ、全体として均整がとれた新雑誌といわれた。

（滑川道夫）

ゲイ ミシェル Michel Gay 一九四七— フランスのイラストレーター、絵本作家。父はトランペッター、祖父はクラリネット奏者の音楽一家で、小さいころから、音楽と絵の才能を認められ、ロック・グループに入ってレコードも出す。絵本は『白いふくろうと青いねずみ』（一九七五）を皮切りに、『バランティヌ』シリー

ズ(八〇)、『おせ乳母車』(八三)など家族をモデルにしたもの、『おおかみのクリスマスマス』(八〇)、『ピアンテ』(八四)の動物ものなど幅広い。(末松水海子)

芸術自由教育 げいじゆきゆういく 児童文化研究誌。一九二一年(大10)一月に日本自由教育協会という団体によって創刊された。編集委員は片上伸、北原白秋、山本鼎、岸辺福雄の四人。発行はアルス社。この団体は山本鼎が中心となっていた児童自由画協会が母体となって二〇年一二月に成立したものの。編集委員の顔ぶれからもわかるように「赤い鳥」を中心として展開されてきた児童文芸運動の発展途上で誕生したといつてよく、子どもの個性や創造意欲を伸ばし、その世界に芸術的価値を実現させることを目的とした。詩人、画家をはじめとする芸術家たちが学校教育の改造に積極的になち向かおうとしたことは歴史的に高く評価される。執筆者には右の四人のほか、有島武郎、小川未明、秋田雨雀、土田杏村、与謝野晶子、西村伊作らも加わっており、彼らの論文と児童の作品などが掲載された。白秋の代表的な童謡論『童謡復興』(創刊号)や『小学唱歌歌詞批判』(二〇号)、片上伸『文芸教育論』(創刊号)、山本鼎の『自由画教育の反対者に』(創刊号)もこの誌に発表された。そのほか、自由教育協会が催した展覧会や講習会など、大正期の芸術教育運動の実相が記されている。同年の十一月号をもって終刊。(中野光)

劇画 げきが リアルな画風と実録的素材からなり、

笑いを無視した漫画のこと。名称の起源は、芝居の看板絵「劇画」からという説と、紙芝居の旧称「画劇」からという説とがある。直接的には、大阪の劇画誌「影」(一九五七)に拠った若き劇画家たちが、一九五〇年代の主流である手塚漫画とは違った方向で、画風を切り開こうとした動きの中から生まれた。さいとうたかお、佐藤まさあき、桜井昌一、辰巳ヨシヒロなどの人たちである。彼らは「劇画工房」なる運動グループを結成し、「影」「街」「摩天楼」「無双」「刑事」など、おもに貸本屋向けの短編誌を中心に、過激なアクションとスリリングなドラマ展開で、中高生以上のファンをつかんだ。白土三平、水木しげる、永島慎二などのちに知られる漫画家も、そうした貸本劇画の土壌から登場したのである。六〇年代中期には大手の雑誌が、この新興の劇画のエネルギを吸収し、七〇年代初期に劇画ブームを生み出した。(竹内オサム)

ケストナー エーリヒ Erich Kästner 一八九九—一九七四 ドイツの作家、詩人、劇作家、児童文学作家。ドレスデンに皮職人の息子として生まれる。(近年、実の父親は、ユダヤ人医師チンマーマンであったことが判明)。師範学校に入学したが、軍隊に召集され、健康を害す。敗戦後、ライプチヒ大学で、ドイツ文学、歴史、哲学、演劇史、フランス文学を学ぶ。一九二五年「フ

リードリヒ大王とドイツ文学」で博士号を取得。ライプチヒで新聞記者となるが、筆禍事件で新聞社を解雇され、ベルリンにいき、劇評と詩作に専念する。二八年に出版された風刺詩集『腰の上の心臓』によって、新進気鋭の風刺詩人として注目される。さらに、ライプチヒ時代から寄稿していた週刊誌「世界舞台」の出版者E・ヤコブソン女史の勧めで書いた子ども向けの小説『エーミールと探偵たち』(一九二八)の成功によって、ケストナーは世界的児童文学作家となる。その後も、実用抒情詩と自ら名づけた詩集『鏡の中の騒ぎ』(二九)、三〇年代のベルリンの生感を戯画化した小説『ファビアン』(三一)を大人向けに、市民生活の健全化を子どもに託して描いた小説『点子ちゃん』と『アントン』(三〇)、空想物語『五月二十五日』(三二)を子ども向けに書く。この時代に、ヘルマン・ケステン、オシエツキー、トウホルスキー、A・ツバイク、E・オーザー、W・トリヤーらと親交を結び、保守的・反動的芸術観・政治観に対し、批判を続けるが、三三年には、ナチスにより執筆を禁じられる。多くの作家たちが、亡命する中で、二度ゲシュタポに逮捕されながらもベルリンにとどまる。ナチス時代『雪の中の三人男』(三三)、『消え失せた密画』(三五)などをスイスの出版社から発表したが、四二年には、完全に出版も禁止される。その間、子ども向けの作品としては、『飛ぶ教室』(三三)、

『エーミールと三人のふたご』(三四)、再話作品『ティル・オイレンシュピーゲル』(三八)が出版されたに過ぎない。四五年、身に危険が迫り、映画ロケ隊に紛れて、チロルへ逃げる。戦後、「新新聞」の文芸欄編集長となり、各方面で活躍しはじめる。青少年雑誌「ペンギン」を通じて、戦後の混乱の中で望みを失っている青少年に励ましと助言を与えたり、「子どもの本を通じての国際理解」を訴えるレップマン女史に協力して、国際児童図書評議会や国際児童図書館の設立にも尽力する。児童文学作品としては、『動物会議』『ふたりのロッテ』(以上四九)、『サーカスの小びと』(六二)などが戦後出版された。七四年食道がんのためミュンヘンの病院で死去。ケストナーは、従来の子どもの本にみられた従順で、行儀のよい子どもという理想像の代わりに、自立し、賢く、協調性をもち、自分の人生を理性的に生きる子どもを描き、同時に現実に横たわる問題を取りあげること、児童文学に新しいリアリズムをもたらした。

「エーミールと探偵たち」エーミールと探偵たち *Emil und die*

*Detective* 少年小説。一九二八年。子どものために書いた最初の作品であり、この作品によって児童文学作家としてのケストナーの資質は高く評価され、世界中の子どもから愛される作家の一人となる。貧しい母子家庭の少年エーミールが、ベルリンに住む親戚に会いに

いく途中の汽車の中で、山高帽をかぶった男にお金を盗まれてしまう。いとこをはじめ大勢のベルリンの子どもたちの協力によって、その男を追いつめ、無事お金を取り戻す一種の探偵物語。(田中安男)

ゲーテ ヨハン ヴォルフガング・フォン Johann Wolfgang von Goethe 一七四九—一八三二 ドイツの作家、詩人。ゲーテにも『新メルジーネ』というメルヘンがあるが、子どものためものではない。ゲーテ自身「私は子供のために何も書いたことがない。二十歳の大きな子供のためにさえ書いたことがないのだ」と、エッカーマンに語っている(エッカーマン『ゲーテとの対話』)。しかし、彼の作品は生前からすでに教科書に採録され、学校教育を通じて子どもたちに親しまれてきた。詩や『詩と真実』『イタリアの旅』などの抜粋がそれであるが、年齢がもつと上になるとさらに『エグモント』や『タウリスのイフィゲーニエ』が加わる。教科書以外では、詩『魔法使いの弟子』が挿絵入りで発行(二九六五)され、叙事詩『ライネケ狐』は、繰り返して児童向けの書き直しが試みられている。最近のものとしてはヤーノシュの絵本版(六三)があげられよう。

ケラー Gottfried Keller 一八一九—九〇 スイスの作家。はじめ画家や劇作家を志すが大成せず、小説家に転じる。芸術家志望の主人公の

挫折を描いた自伝的長編『緑のハインリヒ』(二八五四—五五、七九—八〇改稿)は、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』と並び、ドイツ教養小説の代表的作品とされる。のちチューリヒ州の一等書記官となるが、スイスの市民や農民の姿を優しさとユーモアを込めて描いた短編を数々発表する。(若林ひとみ)

ケルン ルドウィック Ludwik Jerzy Kern 一九二九— ポーランドの詩人、作家。風刺詩人としても著名だが、子どもたち少年少女向けの作品が極立っている。洗練された上質のユーモアと軽い風刺のきいた物語が持ち味で、とくに会話のセンスは抜群である。『すばらしいフェルディナンド』(一九六三)、続編『おきなさいフェルディナンド』(六五)、『ぞうのドミニク』(六四)など動物を主人公にしたファンタジーが多い。(内田莉沙子)

ケロッグ スティーブン Steven Kellogg 一九四六— アメリカの絵本作家。子どもも一人一人が独立した個性である以上、一冊の本がすべての子どもに受けいられる筈がないので、幅広い種類の絵本が必要である」という信念のもとに自作、他作とを問わず、その特質を的確に捉えられる画材を選び、画風をつくり出す上で、卓抜した才能を発揮している。『アーのどのおねがい』(一九七二)にみられるように、子どもと動物との交流を描いた作品が多い。(金平聖之助)

玄 恵 げんえ 生年不詳(一三五〇?) (親応一) 南

北朝時代に活躍した学僧、文人。玄慧とも。独清軒、健叟などと号した。台密を学んで法印権大僧都となったが、漢学・和学にも通じ、詩歌を得意とした。鎌倉末期の元応元年(一二一九)、持明院殿の殿上で『論語』を談じて花園上皇に認められ、正中元年(二四)、南宋の魏慶之編『詩人玉屑』(詩論)に加点して禅家の詩僧にも知られるようになった。南北朝期に入り、武家方に重んじられ、建武三年(三三〇)「建武式目」の起草に参加、とくに足利直義の恩顧を受けた。児童文化史・教育史の上では『庭訓往来』の作者に擬せられて著名。同往來は、武家および民衆の営む生活万端を内容とした教科書で、中世・近世・近代初頭の約五世紀間、驚異的普及を遂げた児童用手本であるが、玄恵撰作の確証はない。

(石川松太郎)

研究社 しけんしゃ 出版社。一九〇七年(明40)小酒井五

一郎の設立にかかり、英語教育関係の雑誌・書籍・辞典類の発行を主軸とした。大正中後期には酒井朝彦などを編集者に迎え、児童向けの雑誌「おはなし」「五・六年の小学生」「女学生」などを創刊、また児童図書出版も試みた。児童文学史に残る出版として、小川未明『あかいさかな』(一九二四)、竹久夢二の童話集『春』、『嵐』(以上二六)、島崎藤村『をさなものがたり』(二四)、『力餅』(二二)などがある。

(金平聖之助)

現代漫画大観 かたいだいまん 近代日本における最初の漫画の叢書。一九三八年、田口掬汀の主宰する中央美術

社より刊行。日本の漫画は近代以前の鳥羽絵よりあったが、大正中期に至り、デモクラシー思潮の高揚の中で政治風刺漫画を主軸として多彩な展開を示し、この叢書はその収穫の意味を担った。第四巻に『ゴドモ漫画』編があり、宮尾しげを『猿飛佐助漫遊』、坂本牙城『春は逝く逝く』などを収め、児童漫画の市民権獲得の第一歩と評価されよう。

(二上洋一)

ケンダル キャロル Carol Kendall 一九一七-

アメリカのファンタジー作家。『The Gammage Cup ギャメッジ・カップ』(一九五九)とその続編『The Whisper of Glocken グロッケンのおとやま』(六五)が代表作。ここで荒野に住むミニピン族という作品設定は架空のものだが、かれらが悪意をもつマッシュルーム軍の侵略に打ち勝つという話には、生存をかけた戦いを描くりアリティイがある。個の尊厳と同時に社会参加をテーマにすることも、若い読者向けといえよう。

(谷本誠剛)

厳文井 げんせい → イエン ウエンチン